

ルソー覚書(I)-愛の観念について-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山路, 昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12103

ルソー覚書 (I)

——愛の観念について——

山 路 昭

I

Rousseau はすでによく知られているようにその自伝的著作、とりわけ *Les Confessions* のなかで、かず多くの女性に関するエピソードを書いている。そしてそれらのエピソードのそれぞれが、いつまでも忘れられない追憶として、かれの本性にきざみこまれ、Jean-Jacques という比類のない、ひとりの人間を形成するのに大きな影響をあたえたことを強調している。たとえば、*Les Confessions* の前半のほとんどがその幸福な追憶にささげられているともいえる Mme de Warens について死にいたるまでかれは繰返して語ることをやめない。

ルソーの絶筆となった *Les Réveries du Promeneur solitaire* の最終章 *dixième promenade* の冒頭から、かれは流れさっていった過去の年月に思いをこめながら、ひとりの女性との決定的な出会いについて、なお書くことをやめない。《きょうは枝の日曜日、はじめてヴァランス夫人に会ったときからちょうど五十年になる。……その最初の瞬間がわたしの一生を決定し、そして不可避の連鎖によってその後のわたしの運命をつくりだした⁽¹⁾》のだと。たしかに Rousseau にとって、Mme de Warens とおくった青春のみじかくはあっても、充足した日々は、《わたしの一生で、なんのまじりけもなく、なんの障害もな

い、わたしが完全にわたし自身であった、たったいちど⁽²⁾の《純粋な平和で幸福なつかの間の時期なのであり、その後の半生は、迫害になやまされつづけた、孤独と疎外の人生なのであった。それゆえにこそ、そうした失われた《ほんとうに生きたといえるあの時のことを思い起さない日は一日もない》⁽³⁾と書くのである。

実在の M^{me} de Warens については、すでに多くのことが言われつくされているのであり、*Les Confessions* の物語りと実在の夫人との差異について述べる必要はもはやあるまい。M^{me} de Warens という物語りの人物をとおしてそこにあらわれている Jean-Jacques というひとりの人間の自我のあり方が問題なのである。Rousseau という文学者が青春時代におけるひとりの女性との出会いをとおして、自己にとってもっともあがないがたい、内奥の欲求をいかにして確認し、それを自己の文学の根源的なテーマとして昇華し、探求していったかという問題である。Rousseau という人間を考える場合に、女性との関係、愛の問題が、かれの思想や作品のすべてに直接的に投影され、影響をあたえているとは考えない。しかしながら、そうした問題は、すくなくとも Jean-Jacques の内面のもっとも深いところで、かれの人間的な欲求とかかわりあっていることは否定しえないであろう。しかしながら、Jean Starobinski⁽⁴⁾ も指摘しているように、*Les Confessions* のなかで語られているさまざまな愛のエピソードをあるひとつのコンプレクス（エディプス・コンプレクス）に結びつけて考えるような、精神分析的な方法は《心理学的因果関係のかなり貧弱な理解を容認する》にとどまっている。本質的な問題、すなわち、意識の根源的な志向とその構造の理解がめざされなければならない。そうした観点にたつならば、M^{me} de Warens との体験をその頂点としながらも、Rousseau がありのままの自己を示すものとして描いている、奇異な、そして、それぞれが矛盾し、対立しあっているようにさえも思われる、いくつかのエピソードを、Rousseau 自身の根源的な欲求をふくみ、かつあらわしているものと考えていくことが可能であるように思われる。

そして Rousseau 自身もまた、そうした解釈の可能であることを示唆してい

る。*Les Confession* 第九巻における *La Nouvelle Héloïse* の構想にふれた文
(5)
章のなかで、この恋愛小説の状況設定の中心となったのは、二人の女主人公、
Julie と Claire であり、その原型は M^{lle} Galley と M^{lle} Graffenried という二
人の清純な若い女性との偶然な田園での出会いをとおしての Thône でのわず
か一日の享樂の (le diné du château de Toun) 追憶であったと Rousseau は
語っている。同時に、かれは若い時代に出会ったさまざまな女性たち、*Les*
Confessions をとおしてすでにわれわれがよく知っている女性たち、M^{me}
Basile, M^{me} de Larnage, さらにはヴェネチアでその妖艶な肉体の美しさに戦
慄し、惑乱した娼婦 Zulietta さえも、いうならばほとんどすべての忘れがた
い女性たちのことを思いだしている。このことは、*La Nouvelle Héloïse* の原
構想ということに関していうならば、Rousseau がかれの内部にきざみこま
れ、なんらかの意味でかれの自己形成の過程のなかで役割をはたしたであろう
女性たちのイメージを想起しながら、*La Nouvelle Héloïse* を書きすすんでい
ったことをしめしている。その当時、進行していた、かれが一生でただひとつ
の真実の恋愛とよんでいる M^{me} d'Houdetot との奇妙な事件についてはいう
までもあるまい。しかしながら、こうした仮定にたつ場合に、問題はかならず
しも簡明ではない。*La Nouvell Héloïse* という作品は、Rousseau の個人的な
性と愛に関する体験のたんなる集約とみなすわけにはいかないのであり、そこ
では、愛の問題は伝統的な《amour chaste》、《amour-vertu》という観念にし
たがって展開されている。すくなくとも、*Les Confessions* で語られている愛
のエピソードは、かなり奇妙な、精神分析の対象となるような症状がみられる
のであり、そこには矛盾し、混濁した個人の意識がさまざまな形のもとで語ら
れている。したがって愛の体験という生のレヴェルにおいてあらわれている
Jean-Jacques の自我のあり方と、*La Nouvelle Héloïse* という仮構をとおして
あらわされている愛の観念のあいだに、ある種の距離と差異がみられるのは、
当然なことであろう。この小論でまず第一に考えてみたいことは、前者の問題
であり、Jean-Jacques のさまざまな体験のなかから、かれの根源的な問題を
さぐりだし、Rousseau の愛の観念の根底にあるものを明きらかにしようとす

ることである。さらにまた、そうすることによって、*La Nouvelle Héloïse* という作品が成立している地平へのアプローチもまた可能になるであろう。

Ⅱ

まず最初に、*La Nouvelle Héloïse* が構想された1756年という時期における Rousseau の伝記的状况について簡単にふれておきたい。*Les Confessions* 第九巻の記述があげられている1756年という年は、Rousseau の生涯においてもやがて訪れる破局を前にしながらも比較的安定した年であった。すなわち、M^{me} d'Épynay の好意によって、この年の春、Rousseau はパリ近郊の l'Ermitage に小屋を提供され、やがて生涯の伴侶ともなる女性、Thérèse Le Vasseur とともに移り住んでいる。かれはパリという都会を離れ、永年にわたって望んでいたように、社交界から遠ざかり、世論の影響を受けることなく、自立し、自然に向いあい、孤独のうちに自己に沈潜した生活を送ろうとしたのであった。この時、すでに Rousseau は四十四歳に達していたのであり、*Le Discours sur l'Inégalité* を発表した後、いわゆる三大作、*Du Contrat Social*、*La Nouvelle Héloïse*、*Émile* などの構想にあいついでとりかかっていた、かれの多彩な著作活動のうちで、もっとも活動的な、充実した時期なのであった。しかしながら、Rousseau は、こうした平和で充足していたように思われる時点において、《もっとも渴望していた幸福のさなかにいながら、すこしも純粋な楽しみをあじわうことができない》と自己の本来の欲求の充足されないことを歎息し、M^{me} de Warens との幸福を追想しながら、《ああ、ここもやはりレ・シャルメット⁽⁶⁾ではない》と叫ばないわけにはいかない。さらにまた、みずからがもはや人生の終着駅に近づこうとしていることを認めながら、かれの心が渴望していた快樂が、いまだかつて一度も、完全に充足されたことがなく、かれの内部において燃えている官能的な情念の欲求もまた、現実の対象をいまだに見出していないと告白している。このことは、生きるということの根源的な欲求にそくしていうならば、《生きるということは愛する》ということなのであり、そうした《愛し、愛されたいという欲求》が、友情というかたちにおいても、異性

との愛情においても、実現されたことがないのである。

たしかに Rousseau はこうしたかれの根源的な欲求について繰返して語っているのだ。たとえば、《自分に近づくすべての人から愛されたいというのが、わたしのもっとも強い欲望だった》⁽⁷⁾ のであり、《わたしは友情のために生まれ⁽⁸⁾てきた人間であり》、*Réveries* の冒頭においては、またみずからをだれよりも《le plus sociable et le plus aimant》⁽⁹⁾ な人間だと規定している。一方、Rousseau はまた *L'Inégalité* や *Émile* のなかで、《自然人》l'homme de la nature を規定しながら、自然状態のなかで人間が本来もっている唯一の感情は、自己を保存しようとする欲求《自己愛》amour de soi であり、自己の保存だけを考え、それぞれ孤立し、独立の状態⁽¹⁰⁾で直接的な自己の充足にのみ生きているような人間にとって、《amour de soi》は人間のあらゆる情念の根源にあり、人間が生まれながらにしてもつものであり、それは《いつも善良でいつも秩序にかなっている》と Rousseau は断言している。そしてまた、こうした《amour de soi》、自己自身にたいする愛の直接の結果として、自然人は他者にたいする共感、人間が自然の状態においてもっているただひとつの道徳的感情であり、自然の徳(vertu naturelle)でもある《憐憫》pitié をもっている。したがって、《子供は生まれながらに人に好意を感じる傾向をもっている》⁽¹¹⁾ のである。しかしながら原初の状態における人間は、あくまでも他者との関係において生存しているのではなく、孤立しているがゆえに、こうした pitié もまた自然の純粹な衝動であり、自然の感情にとどまっている。それが友情という形態をとってあらわれるのは、はるか後になり、人間が社会を形成することによってである。さらにまた恋愛についていうならば、自然人の欲求は、肉体的な欲求につねにとどまっている。かれらは《定まった住居もなくたがいに相手が必要としない》⁽¹²⁾ のであり、言語によるコミュニケーションの必要もなく、男性と女性はまったく偶然にたんなる肉体的な要求にしたがって結合しているのにすぎない。

したがって、友情も恋愛も《社会の状態》において、すべての悪の導入とともに生ずる。生産・技術の発展、進歩と土地の私有が、人間社会の不平等を拡

大していき、人間と社会のあらゆる領域において、あらゆる種類の悪がみちびきいられ、人間は、かつてその原初の状態においてそうであったような、自己自身に充足するような幸福から遠ざけられていく。他者への共感であった *pitié* は自己と他者を比較し、自己の優越をねがうような《虚荣心》*amour propre* に変質し、あらゆる不正かつ邪悪な欲求の根源となる。したがって、ある特定の対象に向けられ、それを讃美し、所有することを欲するような愛の情熱 *passion d'amour* はまさしく社会のなかで生じた情念なのである。なぜならば、自然の状態においては、《各人は静かに自然の衝動を待ち、熱狂よりもむしろ快感を感じながら、なんらの選択もなくそれに身をまかせ⁽¹³⁾る》からなのであり、反対に、恋愛は他者との関係において比較、優越、排斥などを前提としているからである。恋愛において異性との結合を求める欲求は、一般的かつ自然な欲求であるにせよ、特定な対象をみずからの意志と情念によって所有しようとねがうことは、想像力をともなう人工の感情なのであり、それはある種の価値判断をともなうがゆえに、恋愛は自然の状態に属しているのではなく、自由と道徳の世界に属している。したがって恋愛は、それが人工の、社会的な感情であるがゆえに、ある時にはその抑制しがたい激しい情熱によって人間を悪の破局へとみちびくものであり、またある時は、人間の根源的な《愛し愛されること》をのぞむ欲求を他者との関係、社会の関係をとおして、実現する道へと通じている。

自然の状態において孤独のうちに、完全な自己の充足を見だしていたはずの人間は、社会のなかでは、まったくの孤独ではありえない。Rousseau もまた孤独を好みながらも、ひとりで生きることにはたえられない。 *Les Confessions* 第七巻で Thérèse との出会いについて語りながら⁽¹⁴⁾、彼女がはじめは、《ほんのなぐさみ》にすぎなかったにもかかわらず、いつのまにか《ひとりの伴侶》となってしまったことをかれは認めている。《まったくひとりきりであるとき、わたしの心は空虚だった》のである。Rousseau は、社会の悪をにくみ、虚偽の世論から離れて、自己を独立させるために、そして自然との調和のなかで、自己を解放し、みずからに沈潜するために孤独をあれほど渴望してい

たにもかかわらずである。《人間を社会的 *sociable* にするのは、かれの弱さだ。われわれの心に人間愛を感じさせるのは、われわれに共通の苦悩なのだ。人間でなかったら、人間愛など感じる必要はまったくない。いっさいの愛情は、充足の欠如のしるしなのである。……こうしてわれわれの弱さそのものから、われわれのはかない幸福が生まれてくる。》⁽¹⁵⁾ Rousseau にとって、人間は絶対に他者なしには生きられない存在である。もし他者を必要としないならば、社会もまた存在しなかったはずである。神のように完全かつ絶対な存在だけが、ほんとうの意味での孤独な存在であり、絶対の幸福を享受することができる。つねに、なんらかの欠如であるような人間は、なにかが欠如しているがゆえに、幸福をもとめているのであり、したがって、そうした人間によって享受される幸福とは、やはり、はかなく、こわれやすいものなのである。

しかしながら、Rousseau にとってそうした欠如、《空虚な心》を充足しようとする欲求は《すべてと無とのあいだに中間はないのだから》⁽¹⁶⁾ というように、絶対の欲求なのである。

《わたしの欲求のうち、第一のもの、もっとも大きく、もっとも強いもの、もっとも癒しがたいものは、すべてわたしの心情のうちにある。それは親密な交際 *une société intime* への、できうるかぎり親密な交際への欲求である。わたしにとって、男性よりも女性、男の友人よりも女の友人が必要だったのは、とくにそのためであった。こうした欲求は、肉体がどんなにかたく結びあわされても、それだけでは充足されないほど、異常な欲求なのであった。同じ肉体にふたりの魂が存在していることが必要だったのであり、さもないと、わたしはいつも空虚を感じていたのだった。》⁽¹⁷⁾

Jean-Jacques はまさしく絶対の欲求をかれの内奥にもっている。こうした欲求は現実において完全に充足されることはありえないであろう。かれが感じており、直面している《空虚》 *vide* は絶対の空虚であり、欠如なのである。Rousseau は、人間が弱いものであり、そのためにこそ、《こわれやすい幸福》

をもとめようとする傾向をもっていることを知っている。しかし、それにもか
かわらず、神のように絶対の幸福をもとめなければならない。みずからは、
中間的な存在であるにもかかわらず、かれは、ゆらぐことのない完璧な人間の
結合をもとめようとしている。もっと後年になって、はるかに迫害妄想になや
まされながら、*Dialogues* のなかで、《いっさいのかれの不幸は、子供の時か
らかれの心をなやませつづけた、愛したいという欲求から、ただひたすら生ま
れたのである》⁽¹⁸⁾と Rousseau は書いている。たしかにかれは友人たちによっ
て、その友情をうらぎられ、かれがもとめてきた真実のために、社会から迫害
され、さらには信頼と愛情をかたむけようとした女性たちからも遠ざけられ、
いうならば、かれが真実としてもとめてきた親密な社会 *société intime* その
ものによって不幸にも苦しめられている。かれの純潔な心情は、外部のさまざ
まな悪によってたえず混濁されようとし、かれは、自己が真実の自己、ありの
ままの自己でなくなるような危険に、たえずさらされている。しかしながら、
こうした外界と内面、外見と本質との分裂のなかに、不幸が存在しているだけ
ではない。不幸はさらにかれ自身のもっとも深い、根源的な欲求のうちに存在
している。したがって、かれは *société intime* の実現のために、外面の障害
を克服しなければならないと同時にかれ自身の本性である、自我の内部に深く
おりていかなければならない。

《子供の時から》、そしてまさしく、その誕生のときから、Jean-Jacques は、
不幸なのであった。《わたしが生まれたために母は死んだ、こうしてわたしの
誕生はわたしの不幸の最初のものとなった》⁽¹⁹⁾のである。Jean-Jacques という
人間の生の悲劇のすべてを母への希求、再発見といったことに結びつけて考え
ることはないにせよ、すくなくとも、母の愛を知らずに育った子供が、母なる女
性をもとめようとするのは明白なことである。Rousseau の記述のなかには、
母なる女性への運命的な志向が感じられることもたしかなのである。かれは同
じ *Les Confessions* の冒頭で簡略に自己の出生について述べながら、《わたし
に生命をあたえてくれたのは、こういう人たちであった。天がかれらにさづけ
た性質のうち、感じやすい心 *coeur sensible* この一つだけをわたしにつたえ

てくれた。この心はわたしの一生ではあらゆる不幸のたねとなった⁽²⁰⁾》と述べている。すでに最初にあげた *Réveries* の最後の章でも *Mme de Warens* との出会いについて、《不可避の連鎖によってその後のわたしの運命をつくりだした》とかれは書いている。かれが終生をとおして、*maman* と呼んでいた女性との出会いの《最初の瞬間》が決定的であったのと同様に、母の死も《最初の不幸》だったのである。さらにまた、奇妙にも最初の自我との出会いもまた母の追憶につながっている。

《五、六歳の時まで、なにをしたか、わたしは覚えていない。どんなようにして読み方を覚えたかもわからない。ただ最初に読んだ本のことと、それがわたしにあたえた影響のことしか思いだせないのだ。わたしが自意識というものを中断なしにたどりうるのは、この時からである。わたしの母は小説類をのこしておいた……⁽²¹⁾》

ここでは、Jean-Jacques はまぎれもなく、母のかたみ、母への追憶をとおして自我の最初の発見へと結ばれている。しかも自我の発見はまた同時に想像力との出会いでもある。かれにとっての不幸、悪は、まず第一に母、すなわち、最初の自然からの離別であり、Jean-Jacques は、その最初の瞬間から、自己自身のためにのみ生きることをよぎなくされている。Jean-Jacques は、危険きわまりないやり方で、理性による認識がまだはじまらない以前に、現実の多様な真実を理解するよりも前に、《すべてを感じ⁽²²⁾》てしまっている。かれがなにもよりも先に感じていたことは、自己の宿命であり、自己の根源的な欠如であり欲求であったはずである。たとえそれがやがてどんなに避けられない、恐しい結果の連鎖を生みだしていくことを明らかに自覚してはいないにせよなのである。こうした欠如の感覚と Rousseau の感じやすい、他者を愛そうとする心、人間をまず最初に、*sociable* にする生来の傾向についてはすでに見てきたとおりであるが、もう一方で、欠如感⁽²³⁾は想像力をかりたてるものでもある。Jean-Jacques はこうした読書によって、他者とは異った奇妙なロマネスクなイメージを生にたいしてもつようになるのだ。《想像はわれわれを幸福な人の場におくのではなく、不幸な人々の場におく⁽²³⁾》のである。Rousseau は、みずからが

孤独で、空虚であることを思えば思うほど、Les Charmettes の失われた幸福を想像し、不幸な現実から脱出し、自己をみずからの夢にゆだねなければならない。

III

母なる女性の欠如が、Jean-Jacques の自意識のめざめと深いかかわりをもっているのと同様に、性の自覚もまたかれの意識のあり方に重要な意味をもつことになる。Rousseau は、事実、自我の形成にあたり、幼少時代から青春期への転機における、性の問題の重要性について注目している。そのことは、たとえば *Émile* 第四篇などでくわしく述べられている。しかし、ここで問題にしたいことは、そうした理論的考察の領域においてではなく、Jean-Jacques の個人的体験についてである。なぜならばかれ自身も語っているように、そうした体験はかれの存在の内奥の欲求と深くむすびついている。《親密な交際》、《同じ肉体にふたりの魂が存在する》ような、親密で直接的な交流を、男性をとおしてではなく、かれは女性をとおして実現することをねがっている。そして、女性との接触をとおしての Jean-Jacques の性のめざめは、Bossey での M^{lle} Lambercier からうけた体罰の経験からはじまっている。Bossey の滞在は、《わたしの子供の時代のほがらかさの終りだった。このとき以来、まじりけない幸福はもはやあじわえなくなった》⁽²⁴⁾ という幼少時代の幸福な統一が失われ、Rousseau の意識のうちに、はじめて悪と分裂がもたらされた決定的な時期でもあった。このとき、監督者でもある年長の婦人の体罰をとおして Jean-Jacques が知ったことは、罪の意識になやみながらも、《苦痛のうち、恥ずかしさのうちにさえ、ある官能的なものがまじりあっている》⁽²⁵⁾ ことである。Marcel Raymond らの見解にしたがうならば、それは幸福な辱しめによって倍加された受身の快樂であり、その快樂の対象はいまだにはっきりと限定されていない。しかしながら Rousseau 自身が《わたしの好みや欲望や情熱、その後のわたしまで》がそれによって決定されてしまったと語っているように、かれの女性にたいする態度に深いかかわりをもつことになる。Jean-Jacques は女性

にたいしてつねに受身なのであり、Goton とよばれている女性との例がそうであるように、愛する女性を前にしながら、沈黙し、情熱的な想像にみずからをゆだねたり、あるいは《横柄な恋人の膝下にひざまずいて、命令にしたがい、⁽²⁷⁾赦しをこう》ことに快樂を感じるのだ。かれは女性たちのかたわらに真実の幸福をもとめながらも、恥辱と欲望にさいなまれ、埋めあわせの幸福しか見いだしえない。

たしかに Rousseau はさまざまな女性との出会いのなかで欲求の充足には到達していない。そればかりではなく、*Les Confessions* をそのまま受けとるならば、Jean-Jacques の性的な欲望は、長いあいだその特定の対象をもとめることができない、漠然とした混乱の状態にとどまっていたように思われる。

《わたしは自分の欲情をもてあますことが多かった。そわそわしたり、ぼんやりしたり、物思いにふけったりした。涙をながし、ため息をつき、それがなにてあるかはっきりしないが、しかも自分には欠けている幸福にあこがれた。……こういうことを想像できるひともわずかだ。なぜかというと大部分のひとは欲望の陶酔のうちに享樂をすでに感じさせるような苦しいと同時に甘美な生の充足を回避してしまっているからだ。わたしの燃える血はたえず頭を少女や婦人でいっぱいにしていた⁽²⁸⁾》

かれがねがっているものは幸福な、体罰によって実現されたような受身の幸福であったはずだが、そうした幸福はしばしば、想像の幸福に変容してしまう。かれは罪の意識とそれがもたらす《恥辱と苦痛》によって、女性から遠ざけられており、みずから積極的にイニシアチブをとることはできない。そのうえ、天性、かれは臆病でもある。したがって、Rousseau は、そういう現実における欲望の充足の欠如を埋めるものとして、繰返して、みずからの夢想のうちに充足をもとめたことを強調している。かれはある時は激情におそわれ、その陶酔のうちに呆然自失したり、ある時は他人の情事をかいまみて嫌悪をいだいたり、またある時は、漠然とした思いをよせたりするのだが、いずれにして

も、かれの欲望はたえず抑圧され、かれの自我はつねにその内部にとじこめられ、いいあわすことのできない不安と混乱によって、かれの意識は混濁している。しかしながら、そうしたかれの内部にとじこめられた欲求、明確な表現をみだしえない意識が、ある瞬間の体験をとおして、外部にむかってあふれようとして、つかの間の充足を経験するのである。M^{me} Basile とのエピソードがそのことを物語っている。

《わたしはしばらく見つめていたが、我を忘れてしまった。入口のところに膝をつき、情熱の発作といったように、両手を彼女のほうにさしのぼした。……彼女はこちらを見ず、声もかけなかった。が、頭を半分だけこちらに向けて、自分の足もとの敷きごさを指さした。身ぶるいしたのと、叫びごえをあげたのと、おしえられた場所へとんでいったのと、これはもう同時だった。しかし信じられないことと思うが、こうなりながら、わたしはそれ以上に何ひとつあえてしなかった。一言もいえず、眼を上げて見ることもできず、そのような、きゅうくつな姿勢でいながら、女の膝に一瞬もたれかかるために、その身体に触れることさえできなかった。わたしは、おしのように黙って、身動きもしないでいた。⁽²⁹⁾》

これが、Rousseau が《彼女の傍ですごした短い時間のことが楽しく思いだされてならない。恋のもっとも純粋な、もっとも甘美な快樂が生まれてくる瞬間を味わった⁽³⁰⁾》と書いている情景である。Rousseau が繰返して語っている《les plus doux et les plus purs plaisirs de l'amour》とはなにを意味しているのだろうか。Jean-Jacques は、美しい女性を前にして、ただひざまずいているだけであり、かれは激情におそわれ、陶酔にみずからをゆだねているのであり、沈黙をよぎなくされ、身動きひとつできない。ただひたすら Jean-Jacques は、無言のままに愛する女性と向いあい、いっさいの思いをこめて、愛する対象をみつめている。すべてはただそれだけなのである。つかの間の幸福な瞬間は、たちまちにして邪魔ものがはいりこみ、Jean-Jacques は別れの

しるしに彼女のさしだす手に口づけをして、すべては終わっている。しかしながら、その一生をとおして、《これほど甘美な瞬間はまたとない》のである。

Starobinski はこの情景を分析しながら、こうした二人だけの向いあいの幸福は、Jean-Jacques の愛の告白と Mme Basile のそれとが共通の言語にたよらず、純粋な感情の signe によっておこなわれたことにもとずいていると述べている。さらにまた、Jean-Jacques にとって恋の幸福とは、所有することにあるのではなく、向いあっていること、そして向いあっていることの緊張のうちにのみ存在しているとも言っている。⁽³¹⁾

たしかに Jean-Jacques にとっては、《ちょっとした指の合図》、《唇にかすかにおしあてられた手》、それだけで十分なのである。かれの瞬間的な充足は、もし言葉や、よけいな行動がくわえられるとすれば、一瞬のうちにこわれ、消失してしまうことになるだろう。現実の女性に向いあっている Rousseau は、つねにその生来の臆病さから、自然にふるまうことができないのであり、そしてまた、かれはあまりにも感じやすい心をもつがゆえに、激情のあまりに、戦慄し、自己を見失っているのであり、かれは、女性とのコミュニケーションにおける通常の方法や手段を見だし、それをもちいることはできない。ようするに、かれにとって、現実の女性はあまりにも重苦しく、それが現実であるがゆえに、混濁した存在であり、かれを不安におとし入れ、平穩で明澄な二人の心情の交流を完全に可能にするような存在ではない。かれの欲求は、《もっとも純粋な、もっとも甘美な快樂が生まれてくる瞬間》に満足し、そこにとどまっていることをよぎなくされているのだ。Mme de Warens にはじめてあった、枝の日曜日のある時にも、言葉は必要なかったのである。Jean-Jacques は《最初の対面、最初の一言、最初の一瞥》⁽³²⁾によって彼女にたいし愛情と信頼を感じてしまっている。二人の心情を結合するためには、それだけで十分なのであり、愛の真実の幸福と喜びは、肉体の所有にはない。むしろ、欲求が欲求としてとどまっているような状態、いうならば充足されず、実現されない欲求そのもののうちに存在している。かれにとっては、欲求すること自体が、享受することなのである。なぜならば、こうした現実のものとならない欲

求が、かれの感覚を燃えあがらせ、その想像力を燃焼させることができるからである。そして、こうした直接的な官能の充足をとまなわない、それでいながら官能的な欲求をも想像力によって充足させようような快楽の享受を、かれは《純潔》innocent なものと名づけているのだ。⁽³³⁾

M^{lle} Grafferried を M^{lle} Galley との Thône での《innocent》な田園での情景は、そのことを物語っている。それは、ある初夏の、よく晴れた、美しい一日の若い二人の女性との偶然の出会いの追憶である。Jean-Jacques は快活で美しい女性たちと M^{me} Galley の Thône の古い別荘で三人だけで一日をおくる。食事のしたくをしている彼女たちの《生きいきして愛らしい快活さは純潔 innocence そのものであり》、食卓にはブドウ酒こそなかったが Jean-Jacques のエロティックな個有のイメージであり、かれの愛の夢想をかりたてるすべてがそろっている。クリーム、ケーキ、桜桃……かれは若い二人の女性とわだかまりもなく、すっかりうちとけて向いあっている。そこには《陽気さや甘美な喜び》があるだけでなく《官能》sensualité の充足まであるのだ。Jean-Jacques はみずからの夢想と向いあいの幸福に充足している。M^{me} Basile の場合と同じように、かれはただ一度だけ、M^{lle} Galley の手に口づけしているにすぎない。

《われわれ三人のあいだを結びつけていた愛の結合 tendre union はもとはげしい快楽におとらぬものだが、がそういう快楽とは両立しないものであったろう。わたしそちはなんの秘密もなく、恥ずかしさもなく sans mystère et sans honte 愛しあったのである。……純潔な行い innocence des mœurs のなかにも官能的な喜び volupté はあるものだ。それが別の快楽に劣ることはない。それは中断なく、ずっとつづいてはたらくからである。》⁽³⁴⁾

たしかに Rousseau がねがっているのは、純粋な快楽 volupté pure なのであり、かれの想像力にみずからをゆだねられるような、激情をとまなわない、《愛の結合》なのである。かれにとって、激しい、官能的な愛はつねになにか

しら、恥辱 *honte* と秘密 *mistère* をともなっているのだ。それはすでに *M^{lle} Lambercier* の体罰を待ちうけていた少年、*Jean-Jacques* の欲求それ自体のうちにもひそんでいたものであり、みずからの出生を母の死によってむかえたという、罪の意識のなかにも存在している。*La Nouvelle Héloïse* の前半で、*Julie* と *Saint-Preux* がはげしく苦しむことになるのもまたかれらがもっている *amour-passion* にたいする罪の意識なのである。*Rousseau* は、ヴェネチアの娼婦 *Zulietta* との体験をとおして、かれが女性の肉体にたいしてもっている、ある種の恥じらいと恐怖感を明らかにしている。*Zulietta* は一見したところ、《自然と愛の傑作》であるような完璧な美女なのである。しかしながら、*Jean-Jacques* の感覚は、こうしたあまりにも強烈な実在をまえにして、その重圧にたえきれない。かれは混乱し、恐れ、不安になり、《突然、身を焼く情火は消え、ぞっとする冷気が血管をかけめぐるので感じる》⁽³⁵⁾ のであった。かれは坐りこんでしまい、子供のように涙さえこぼしている。そして、その時、最初の瞬間がかれの幸福な夢想をかりたてたのと同じように、*Jean-Jacques* は、不吉な想念にとらわれ、あらゆるかぎりの想像力をはたらかせて、*Zulietta* の完璧であるように思われる実在のうちに、欠陥をさがしもとめている。*Jean-Jacques* は恥じらいを感じているのであり、みずからをまもうとして、欠陥をももめている。かれの内心の不安が実在の女性との、現実の快楽を享受することをさまたげている。

事実、かれはみずからのそうした現実の官能的な快楽にたいする無力さを認めている。*M^{me} de Warens* のかたわらにあり、心からの愛情をかたむけながら、彼女にたいし激しい肉体の情熱を感じないことを告白している。まず第一に、かれは愛する女性をまえにして自己の欲望や想像力を制御できなくなり、自己が自己でなくなることを怖れている。かれにとって必要なことは、魂と魂とのむすびつきであり、向いあっているときに、感じられる、自己と他者の一体感なのである。第二には、*Jean-Jacques* の性的な欲望は、女性をまえにして、しばしば《嫌悪や不安》を感じなければならず、そのために直接的な充足をさまたげられている。*Rousseau* が *M^{me} de Warens* にたいして肉体的な交渉を

否定しているのは、この二つの理由からなのであり、したがって、Jean-Jacques は *maman* を抱きながら（抱かれながら）、彼女の姿を《ありとあらゆるやり方⁽³⁶⁾》で想像の恋人に変容させようとするのである。Rousseau がいदैているような《愛する》ことの欲求は、かれが自己の内部にもっているリビドーにより、実在の対象をまえにしては、奇妙に分裂したかたちをとらざるをえない。かれは、自己の性的な欲求と精神の欲求とのあいだの分裂と矛盾にたえず苦しんでいるのであり、その両者が同時に肉体の所有をとおして満足されないことを告白している。たとえば、Thérèse はたんに性的な欲求をしをかみたさないような、M^{me} de Warens の埋めあわせにすぎなかったのである。

しかしながら、*Les Confessions* において、ただの一度だけ、そしてはじめて、そうした肉体の欲求を充足させたと書かれている実例がある。それは M^{me} de Larnage の場合である。この年長の女性は、《それがなかったために、わたしがわたし自身であることを妨げられていた自信をあたえてくれた⁽³⁷⁾》のであり、彼女は Jean-Jacques の充足をさまたげてきた、生まれつきの臆病さをとりのぞいただけでなく、かれの不安と恥ずかしさを消しさることができたのであった。さらにまたこの偶然にであった女性にたいしては、Jean-Jacques は M^{me} de Warens にたいしてつねに感じつづけていたような、愛することの絶対的な要求にかられることもなく、向いあっている。こうした、あらゆる存在にたいする不安から一瞬、遠くはなれたとき、Rousseau の意識は、みずからの内部から、外にむかって開かれていく。このとき、かれが経験したものは、《いささかも苦痛のまじらない、純粹ではげしい甘美な官能の快樂》なのであり、《わたしが快樂を知らずに死なないですむのはラルナーージュ夫人のおかげである⁽³⁷⁾》。

しかしながら、一方にこうした M^{me} de Larnage との官能の充足があるとしても、《快樂を味わう！ いったい人間にとって許されたことであろうか。ああもしわたしが生涯に一度でも愛の歡喜をあきるほど味わったとしたら、わたしの弱い生命がそれにたえられたとは思われぬ。そのまま死んでしまったら⁽³⁸⁾》と Rousseau は告白している。こうした官能の充足とそれにたいする

Rousseau のためらいと不安について、Pierre Burgelin はおよそ次のように述べている。⁽³⁹⁾ ルソーの生においては、性的欲求は漠然と予見された近づきがたい天国のような形をとっている。かれの心情は、肉体的な愛もまた絶対のものであることをねがっている。しかしながら、かれは Mme de Larnage によって官能の快楽を経験しながらも、そうした快楽について失望を告白しているのだ。絶対的な、瞬間の陶醉、そして同じく絶対的な交流の陶醉、それはひとつの神秘であり、その秘密は滅びることによってしか明らかにならないようなものである。M^{lle} Lambercier の体罰の経験をつけくわえて考えるならば、Rousseau にとって快楽は苦痛にむすびつけられているのであり、そのことが死と愛の陶醉に近いものになっている。こうした Burgelin の見解は、ヨーロッパ文学における愛の情熱、愛の神話における伝統的な観念をふまえながら、Rousseau の個人的体験のなかから、*La Nouvelle Héloïse* の展開を先どりしようとしている。Rousseau の生活体験をとおして、かれの存在の内部にある愛の秘密を、Julie と Saint-Preux の愛の神秘と悲劇にまでむすぼうとする展望なのである。このことについては、また別の機会にふれることになるであろう。ただここでは、Rousseau にとって、官能的な欲求もまた《すべてと無とのあいだに中間はない》という絶対的な欲求なのであり、したがってそれは死に近いものであり、現実におけるそうした欲求の充足はありえないということだけを確認しておきたい。

IV

もういちど Mme de Warens との問題にたちかえておきたい。Jean-Jacques が彼女にもとめているものは、あくまでも《親密な交際》なのであり、肉体の関係は直接的には問題にならない。

《あえていうが、恋愛のほかになにも感じないという人は、人生のもっとも甘美なものを感じない人だ。わたしは恋愛とはちがったある感情を知っている。それは恋ほどはげしくないかもしれぬが、もっともっと心地よく、と

きには恋にむすびつくけれども、また離れていることもある。この感情はただの友情ではない。もっと官能的 voluptueux でもっと愛情のある tendre ものである⁽⁴⁰⁾》

冒頭で述べたように、Rousseau が l'Ermitage の Thérèse との孤独な生活のなかで、かれに欠けていると感じていたものは、まさしく、こうした恋愛よりもはるかに《voluptueux》な、そしてはるかに《tendre》な感情なのである。そしてまた、Jean-Jacques が Thône の別荘で娘たちと向いあいのうちに享受したのもこうした《愛情の結合》tendre union の幸福、すなわち《純粋な快楽》volupté pure の《純潔な》innocent 幸福なのであった。しかしながら、Rousseau はこうした幸福がつねにつかの間のものであったことを歎いているのであり、それがもはや追憶のなかにしか存在しないとくりかえしている。La Nouvelle Héloïse の重要な問題のひとつは、現実には Rousseau の追憶のなかでしか永続してはたもたれていない、こうした愛の幸福をいかにして仮構のうでで永遠の現実として存在させようかということなのである。このことは、また《わたしたちが初めて会ったときの一瞥、これが彼女に感じた真に情熱的な唯一の瞬間》をいかにして永遠のものとするかという問題でもある。Rousseau が提起しようとしているものは、たんにこうした愛における時間の問題だけではない。かれが、M^{me} de Warens という象徴的な存在をとおしてねがっているような関係は、二人の人間が《全存在を共有し、二人だけで充足し》あっているような《より本質的な所有》、《官能や性や顔だちとは無縁であり、むしろそれによってはじめて自己たりうるもの、存在をやめることによってしか失えないものにかかわる所有⁽⁴¹⁾》なのである。そしてこうした全的な所有は、肉体のたんなる所有をはるか越えたところにしか存在しえないであろう。Rousseau は *Les Confessions* において、かれの意識の根源にあるさまざまな生の問題を提出している。多機な意識のさまざまなあらわれであり、一見したところ矛盾にみちたその生のエピソードのなかから、かれにとってもっとも本質的な、根源的な人間の願望がきこえてくるように思われるのである。さらに

また、Rosseau における愛の問題は、愛の情念が社会における、人工的な情念であるがゆえに、自由と道徳の問題と深いかわりをもつことになる。*La Nouvelle Héloïse* という作品が、そうした問題に多くのスペースをさいていることは言うまでもない。もしこの作品が、現代においてあまり多くを語られないとすれば、Rousseau が *Les Confessions* で語っているような、生におけるさまざまな問題をあまりにも自己の側にひきよせ、現実の社会におけるトータルな完璧な人間の結合を夢想しているからではないのだろうか。

注

- (1) *Rêveries, 10^e Promenade*. O. C., I, p. 1098
- (2) *Ibid.*
- (3) *Ibid.*
- (4) Jean Starobinski: *J.-J. Rousseau La Transparence et l'obstacle*, p. 206
- (5) *Les Confessions*, Liv. IX. O. C., I, p. 426-427
- (6) *Op. cit.*, p. 425
- (7) *Les Confessions*, Liv. I. O. C., I, p. 14
- (8) *Ibid.*
- (9) *Rêveries, 1^{ère} Promenade*. O. C., I, p. 995
- (10) *Emile*, IV. O. C., IV, p. 491
- (11) *Op. cit.*, p. 146
- (12) *Inégalité*, O. C., III, p. 146
- (13) *Op. cit.*, p. 158
- (14) *Les Confessions*, Liv. IV. O. C., I, p. 332
- (15) *Emile*, IV. O. C., IV, p. 513
- (16) *Les Confessions*, VII. O. C., I, p. 332
- (17) *Op. cit.*, p. 414
- (18) *Dialogues*. O. C., I, p. 827
- (19) *Les Confession*, Liv. I. O. C., I, p. 7
- (20) *Ibid.*
- (21) *Op. cit.*, p. 8
- (22) *Ibid.*
- (23) *Emile*, IV. O. C., IV, p. 508
- (24) *Les Confessions*, Liv. I. O. C., I, p. 20
- (25) *Op. cit.*, p. 15
- (26) *Op. cit.*, p. 15. Note 2

- (27) *Op. cit.*, p. 17
- (28) *Les Confessions*, Liv. III. O. C., I, p. 88
- (29) *Les Confessions*, Liv. II. O. C., I, p. 77
- (30) *Ibid.*
- (31) *Op. cit.*, p. 186
- (32) *Les Confessions*, Liv. II. O. C., I, p. 52
- (33) *Op. cit.*, p. 76, Note 1
- (34) *Op. cit.*, Liv. IV, p. 138
- (35) *Op. cit.*, Liv. VI, p. 320
- (36) *Op. cit.*, Liv. IV, p. 219
- (37) *Op. cit.*, Liv. VI, p. 358
- (38) *Op. cit.*, Liv. IV, p. 219
- (39) *Pierre Burgelin: La Philosophie de l'existence de J.-J. Rousseau*, p. 374
- (40) *Les Confessions*, Liv. III. O. C., I, p. 104
- (41) *Op. cit.*, Liv. V, p. 222

附記 なお Rousseau の Texte は *J.-J. Rousseau, Oeuvres complètes, bibliothèque de la Pléiade, Gallimard* を使用。